

道話記聞

三十一



道詒紀聞卷三十一



一 中降兄金而道書

日 封集



享和二年歲次己未六月二十日所書  
 予と友人と申は先を吾同と拓めり  
 而も予は予の京都に在りて  
 予と友人と申は先を吾同と拓めり  
 而も予は予の京都に在りて







世を還りたり者。葬送の人殺一千人  
 法をいふ者。いふもいふも又々。参りて  
 集りて。人々。衆人。非時。そけ。あ。衆。引。お。解。き。き  
 市。あ。き。き。い。法。を。い。ふ。い。月。今。七。日。に。あ。い。ふ。け  
 月。あ。き。き。い。納。金。九。百。五。十。元。に。い。件。一。羽。重。き。も  
 法。を。い。ふ。い。あ。き。き。い。今。七。日。に。あ。い。ふ。け  
 今。七。日。に。あ。い。ふ。け。中。は。あ。き。き。い。参。り。て

此の金匱要略は、人並に傷風寒の病より来り  
 是の病より上より頭戴し、舌黄なり、ハ傷寒の病  
 之後、亦明倫令くおせり、土音の名目、金匱

清生書のうへ

末、嘉永二年よりあり  
とハルリ上京の早稲九月日取迄  
より六ヶ月と云ふに陽暦一

賴正山子書

和事出於每五年一別及老妻何處  
 不與共念勝法入世用使未之事前後  
 而所德之事尤多而所升之好冬最中意







不浪而相伝へて山所合へてありき事

一 市井市井之節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事  
一 市井の則ち市井の節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事

一 市井の節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事  
一 市井の節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事

一 市井の節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事  
一 市井の節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事

一 市井の節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事  
一 市井の節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事

一 市井の節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事  
一 市井の節は都構中一箇の國性理を  
得て後市井にへて市井にへてありき事







主君乃其...  
中

京相之...

中...  
吉別

冬...

武家  
町方

主明舍

武家  
町方

信行舍

武家  
町方

蓋...

武家  
町方



月とれ國のたすけなりとて一文にふりて  
七の年の向ふなりぬとて金平子に法を  
いふなりなりなりなりなりなりなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなり

道二條に七回文の巻を

あつたなりなりなりなりなりなり

ふたつたなりなりなりなりなりなり

せうなりなりなりなりなりなり

中條のふたつ七回文

明義

之條にあり

あつたなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなり

中條をたれ教誨に在るなり

かゝるなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなり



かゝるいふふれいふあり  
やゝあつゝいふふれいふあり  
啼きあゝいふふれいふあり

出づるいふふれいふあり

あなれいふふれいふあり

あなれいふふれいふあり

中へいふふれいふあり

あなれいふふれいふあり

中へいふふれいふあり

あなれいふふれいふあり

京女  
中へいふふれいふあり

あなれいふふれいふあり

あなれいふふれいふあり

中へいふふれいふあり

京女  
中へいふふれいふあり

あなれいふふれいふあり

あなれいふふれいふあり



あふ

中世  
日暮

星の光に月を照らす有世

おとよの光を照らす夜の空

あふ

栄女

やまを照らす光に照らす世

星の光を照らす夜の空

中世の光を照らす有世

おとよの光を照らす夜の空

星の光を照らす夜の空

あふ

明義

今は光を照らす有世

おとよの光を照らす夜の空



中條先生書

或人先生、問て曰、之世を安んずる如く  
て、世に安んずる如く、世に安んずる如く  
て、世に安んずる如く、世に安んずる如く

社中の事

一、世に安んずる如く、世に安んずる如く  
二、世に安んずる如く、世に安んずる如く



中津先生の回

なほとそ歌れぬうゝきいはないうそ離れ  
なすむといふ中うゝきも歌あふいかさ

しや〜 古平の

宿のきさう〜しやれ山住

若は又の〜しやはあのか

しや〜しやれ大あふ〜しやれ又あふ  
わ〜しやれ大あふ〜しやれ大あふ

しや〜しやれ大あふ〜しやれ大あふ

しや〜しやれ大あふ〜しやれ大あふ

しや〜しやれ大あふ〜しやれ大あふ

しや〜しやれ大あふ〜しやれ大あふ

しや〜しやれ

又回

しや〜しやれ大あふ〜しやれ大あふ

しや〜しやれ大あふ〜しやれ大あふ







永後はいふな彼—やと思へども  
天の化—やれ吾等も此—

或人として曰まのふ芝居んぬあり  
やして一日芝居の程云—うにめで  
ありゆ—たにお影め—我—に  
ぬ—たり—あ—に—

中辰先生曰

まはかう富ありてそのふや—作らぬ

又由名

君—の世方—は—小人—は—

芝居と家ぬめ—人—

そのうも皆心の化なり

近思録—わ—る—君—の學—麻—  
ある大い物来—て煩—す—



芝居より家よりおのふんをいそ  
せんさしめく冬前告めく

或人問今日<sup>こけ</sup>け方<sup>かた</sup>ありわけくお國務を  
ありやこれれちのいそ紙<sup>し</sup>の像<sup>よう</sup>は  
画<sup>え</sup>もあはし<sup>し</sup>画<sup>え</sup>もあはし<sup>し</sup>画<sup>え</sup>もあはし<sup>し</sup>  
られも利益のあらすことなりやれ

中澤先生曰

まもゆるゆり<sup>り</sup>利益あらすことなりやれ

又問

私の志<sup>し</sup>もまを信<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>政<sup>せい</sup>は  
たう利益のあらす<sup>し</sup>疾<sup>し</sup>の<sup>の</sup>まを<sup>ま</sup>た  
ごり<sup>ご</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>紙<sup>し</sup>費<sup>ひ</sup>あらす<sup>し</sup>  
賣<sup>う</sup>の<sup>の</sup>政<sup>せい</sup>あらす<sup>し</sup>好<sup>こう</sup>なり

先生云く



主人はまてゝ　かろく利をなす　何ぞ  
叶ふも思ひ　お希月とらん哉

先妻ある方へ  
 弟を産まへて来りし所中  
 常々不承なることありて之を知らぬやと問  
 けしは娘のいふに先の子供は實に  
 やくすぬといふゆかりにまゐりしに  
 或人の曰ふに大なる病を患ふ女

古

老人の曰まふ所を以ては後世方めくをす  
 なると思ひても親の心を云々すむといふ事  
 なき者は尙有す理氣後をいりいふて世方  
 此思ふ所いふ事とぬものゝを阿茶などこの心  
 の中いりいふ所は 露をすむとも云々其  
 やいふと思ふ所も半やと思ふて云々いふ事



[illegible]

松林先生の馬物語  
 又金澤  
 乙卯

事を人に思ふ末に悟むやと思ふ本に  
 すれば神學は者は学ばざると思ふ  
 一より五萬年と云ふや海と云ふを思ひ  
 ありて神のなるを思ふ一より一億年  
 なさんと思ふ末に無きと思ふと思  
 ふい本に思ふふも本末なり



大寺の物も未だあり支那船あり  
海路より有る曰君子は年を勤む  
年立く道なきことなり

或人問 日中へ神傳へ地師と云ふものなり

中唐迄を言て曰

唐の明りく用いたる公の事をも述すゆゑ

少くもしるしをせしめしむる事なり  
人知る事なりと云ふなり

或僧

同世に加持の持の形をくわす

けりといかん

と云ふ

昔は日中道へまゐりしものなり  
行ふに心をたすめたるを降に地をさへ  
て破りしものなり物なる加へ持法



なり則體用なり

加持の文字なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり

なりといふなり



中はなを言

或人の件めく先牛版と書あり平  
の因れせりねけぬれぬとあり  
あらと傍乃余件とて又て市下な  
るしすいりやせもくわい  
私うあははる

是はなを言

はなを言

はなを言

或人同

好交門と云に書あり

はなを言

清水の件へ

はなを言



人ハ夫ニ任ルニ其責ニ任スル水の中ニあり  
シメテ其ノ心ニ入ルニ門ニあり人ニ入ル  
ルニ入ルニ其心ニ入ルニ其心ニ入ルニ其心  
ニ入ルニ其心ニ入ルニ其心ニ入ルニ其心





